

戦後七十年の今を生きること

紫原中学校 二年 福井 来未

今年、平和都市を宣言してから二十五、戦後から七十年になる。テレビをつければ、戦争の様子や色々な証言が映されている。今の時代に生きる、二十一世紀に生まれてきた私たちには、戦争とは想像もできない世界である。実際の映像を見ても、体験した方の証言をいくら聞いても、戦争の悲惨を本当に知ることにはできない。でも、私たちは忘れてはいけない。戦争から行きぬいてきた方々は、今も精一杯生きている。それでも、あの日のことを忘れられることはない、誰もそう証言する。あと何十年かたてば、日本から戦争を知ることがなくなってしまうのだろうか。もしそうなれば、戦争は誰が語り継いでいくのだろうか。戦争という忌まわしい記憶を、どうやって伝えていくのだろうか。私は戦後七十年という言葉に、そんな疑問をもたずにはいられなかった。

私の家族は全員、戦争を知らない。祖母は終戦した年に生まれ、祖父も幼かったために戦場にはいかなかった。祖父から戦後の生き苦しい生活については、教えてもらったことがある。しかし私は、テレビや本でしか見たことがない。テレビや本で目にするものは、戦争の一部でしかなくて、私の口から戦争のことで語れることは、戦争はくり返してはならないということだ。

沖縄への米軍上陸以降、次の上陸地点として鹿児島は戦場となった。鹿児島市が直接の攻撃目標となったのは、昭和二十年、一九四五年三月十八日から八月六日の計八回の空襲である。鹿児島市は米軍機の通過地点に当たり、機影を見ない日はほとんどないという状況であったそうだ。私はこれを知ったとき、すごく怖くなった。自分のことを殺すかもしれないものが、大切な人の命も奪う力があるものが、絶え間なく頭上を通るのだ。死が、すぐ近くを通るのだ。

また、鹿児島県には唯一の特攻基地があったため、その攻撃は他の地域よりも激しかったそうだ。特攻隊。私は特攻隊というものを、正直一番納得できない。何かをしたわけではない。自ら志願したわけでもない人が、死ぬために戦わなければならないなんておかしい。私はそう思うからだ。鹿児島市が受けた被害は、死者、負傷者、行方不明者、その他全てを合わせると、十一万五千三百八十五人いる。これは人口十七万五千人に対して六十六パーセントにもあたる。鹿児島市だけで、莫大な量の人が戦争の被害にあっているのだ。これを日本、世界規模で考えると、どれだけの人間が戦争に苦しめられているのだろうか。私には到底考えることはできない。

もし私があの時代に生まれていたら。想像もつかないほど、辛くて悲しくて、自分は何のために生きているのか、人は何のために死ぬのか、分からなくなるだろう。戦争のない今でも、分からないのだから。平和のために戦争をする。生きるために戦う。戦って死ぬか、戦わないで一人生き残るか。そんな選択を迫られるのだ。戦わなくても死ぬことだってある。私には分からない。そこまでの戦争が私たちに残したものは何か。平和な今だからこそ、考えさせられるものがたくさんある。きっと分からないままではいけない。分からないからといって、悲しくなるからといって、戦争から目を反らしてはいけない。いつか私たちが、戦争を語り継がなくてはいけない時代がくる。それは十年後かもしれないし、八十年後かもしれない。戦争を知る日本人がいなくなったとき、戦争があったということをおぼえてしまわないよう、私たちがそれを伝えなければならぬ。だから私は、もっと戦争のことを知りたい。この歴史を何年も、何十年も、何百年もつなげていきたい。あの時代のことと、あの時代を生きた人たちの思いを、ずっと忘れずに生きていきたい。